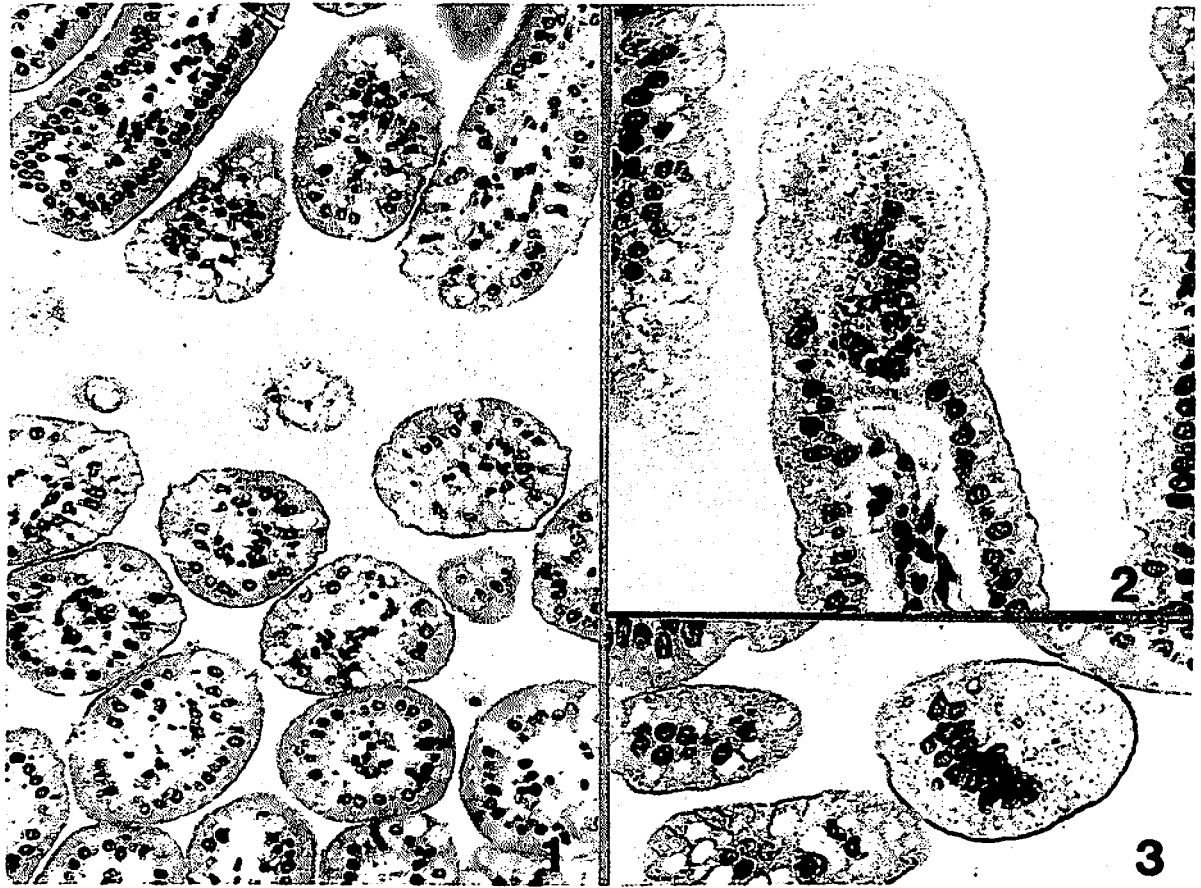


# マウスの十二指腸・空腸

東京大学医科学研究所獣医学研究部出題

第20回獣医病理学研修会標本No.324



**動物：**7日齢で幼仔下痢症由来マウス肝炎ウイルスMHV-D株 $10^3$ PFUを経口接種後4日のCD-1(ICR)マウス。

**症状：**接種後2日目から下痢が認められた。

**剖検所見：**小腸は灰白色を呈し、わずかに膨満、回腸末端より大腸にかけては、内腔に黄色液状物が充満、直腸内に正常の糞塊は認められなかった。肝には小数の白色斑が散在性に認められた。

**病理組織学的所見：**十二指腸、空腸の絨毛はやや短かく、多数の絨毛上皮に認められた空胞変性は絨毛先端部において多かったが、変化の程度は多様であった(図1)。

上皮にはしばしば多核巨細胞の形成が見られた(図2)。巨細胞形成は絨毛先端から基部にかけてひろく見られ、まれには陰窩上皮にも見られた。巨細胞細胞質の一部は好塩基性に濃染し、また、微細顆粒状を呈して大小の空

胞形成をともなうものもあり、空胞化の進んだ巨細胞では核濃縮が認められた。多くの場合、巨細胞中では多数の核は凝集して細胞中心部あるいは基底膜側に認められた。有糸分裂像は見られなかった。巨細胞の一部はいわゆる“balloon cell”の形状を呈し腸管内腔に遊離していた(図3)。

粘膜固有層は一般に顕著な炎症性変化を欠いていたが、巨細胞形成、空胞変性を示す一部の絨毛においては、マクロファージを主体とした軽度の細胞浸潤が見られた。

病変を示す腸管からはウイルスが回収され、また空胞変性上皮および巨細胞のいずれにも免疫蛍光法でMHV抗原が証明された。

**病理組織学的診断：**マウス肝炎ウイルスによる、上皮の空胞化、巨細胞形成をともなう小腸炎。